

概念的彩色について (1)

永 田 勝 彦

我々は外界における客観的実在とは別に、知覚し感情的体験を通し学習や記憶や思考等によつて形成された認識を持つている。そしてその認識は我々にあつては概念化された形において個体内に保持されている。この概念化されたものと外界における実在との間には常に質的量的な差があり、その差異のよつて来たる原因は広く経験の仕方と集積として把握できる。即ち個体の条件と場面の構造との関係として又、場の構造の認識に関与する個体的条件として一つの経験を把握、このような経験を通して抽象化された概念は、次の経験の影響を受けて検討され、次第に固定化された概念へと形成されて行く。しかしながら、概念形成の過程には常にその個体特有の条件によつて客観的実在の認識が主観化されていることは、知覚の領域で明らかとなつているのであるから、そこには多かれ少なかれ概念と実在との間に質的、量的な差が生じると考えられよう。そしてこの事は理論の発展過程において見られ又論理の帰結として得られる抽象的概念化の場合よりも、事実認識特に多くの情緒的体験を伴う場合の概念化に、より明確に認め得るところである。

我々が具体的な彩色に接した場合に持つ体験は、それが言語として表現し得ない時にあつても、感覚的に得られた感情的、情緒的体験、象徴化された意味、嗜好等によつて具体化される。この固定化へ指向する概念構成の過程が先に觸れた“一つの経験”であるが、視点を転じて我々が概念化された彩色を想起する場合、あるいは彩色を概念的に把握する場合、そこには彩色のもつ三属性から、多くの同系色を含む一連の帯をもつた特定の色相全体を包括している。そしてそれにも拘らず、我々は生活において屢々接する特定の色名についてはそれに概念的に対応する

一連の色彩の中にあつて最も妥当と思われる1~2の色彩を代表としてそれに当てる(この際その色名が概念的に上位か下位かという概念上の位相を同時に考察しなければならない)。このような特定の色名に対応する代表色の選定は色彩の概念化であり、この概念化を規定する要因として、色彩のもつ本来的質的要因があり、主体的要因及び経験的要因が考えられる。

本研究は概念的色彩に関する一連の研究の端緒として色名に対応した概念的色彩の分布、代表色の実態及びそれらと嗜好との関係を把握せんとした。

実 験

材 料 色紙は日本色彩研究所による標準色紙100枚とし、純白上質紙上に横3.5cm、縦3cmの色紙を縦5列、横20列に配した。そしてこの台紙が円環になるようにした。各色紙間の距離は横2.5cm、縦1.5cmである。100個の色紙は色環の主要色である赤、黄、緑、青、紫の色を基調とし、それに近い色を表1の如く選び、配列の順序は色研の色彩表示番号によつて色相小→大、明度小→大、彩度小→大とした。

表1 色 彩 表

1	5-18-5.5	26	11-18-5	51	16-14-5	76	21-14-4
2	6-17-5	27	11.5-17-5.5	52	16-14-6	77	21-14-5
3	6-18-3	28	12-14-4.5	53	16-15-4	78	21-15-4
4	6-18-6	29	12-14-5	54	16-15-5	79	21-16-5
5	6.5-18.5-5	30	12-15-5	55	16-15-6	80	23-12-6
6	7-17-5	31	12-15-6	56	16-15-6	81	23-13-3
7	7-18-6	32	12-16-3	57	16.5-13-6	82	23-13-7
8	7-18-4	33	12-16-6	58	17-11-5	83	23-15-7
9	7-19-2	34	12-18-6	59	17-12-6	84	24-11.5-5
10	7-19-5	35	13-14-5	60	18-11-5	85	24-14-8
11	7-19.5-2	36	14-13-5	61	18-12-3	86	1-12-7
12	7.5-17-4	37	14-15-6	62	18-12-5	87	1-13.5-6
13	7.5-18.5-6	38	14-17-5.5	63	18-12-6	88	1-14-10
14	8-17-5	39	14.5-16-6	64	18-14-5	89	1-14-7
15	8-19-3	40	15-12-5	65	18-16-4	90	1-14-9
16	8-19-5	41	15-14-4	66	19-12-5	91	1-15-9
17	8-19-6	42	15-14-7	67	20-12-4	92	1-16-8
18	8.5-18-5	43	15-15-5	68	20-12-5	93	1-17-7
19	9.5-17-4.5	44	15-16-6	69	20-13-5	94	2.5-15-8
20	10-14-3	45	15-17-3	70	20-14-4	95	2-15-8.5
21	10-16-4	46	15.5-15-7	71	21-11-4.5	96	3-17-7
22	10-16-4.5	47	16-12-5	72	21-12-3	97	4-16-7
23	10-18-5.5	48	16-13-5	73	21-12-5	98	4-17-7
24	11-14-4	49	16-13-6	74	21-12-6	99	4-17.5-5
25	11-16-6	50	16-14-3	75	21-13-5	100	5-17-6

方 法

1. 赤、黄、緑、青、紫の夫々について純粹に色彩そのものを概念的に想起させ（用途を考慮せず）好悪を7段階に評定
2. 上記5色を好む順に ranking
3. 色彩表を提示し、その中から1にて想起し評定の対象とした概念的な色彩（あるいはそれに最も近い色）を選び色彩番号を記入
4. 再び色彩表について5色夫々の範疇に入ると思われる色を選択記入。同時に夫々の色の代表色（赤なら最も赤としてふさわしい色）を決定させ、この際、自己の評定の対象とした色とは全く無関係に作業するよう注意。

以上の順序に従つて行つたが、3、4において提示した色彩表は夫々の色毎に他の色に移行する段階の色も含めて円環状となつた表を順次廻転し、一個の色について常に50個の色紙が提示されるようにした。又、この実験は室内で行われたが特定の照明は用いず、晴天の日を選んで5月の自然光線の下、10時から2時半迄の間を利用して実施した。

被 験 者 女子短大生 80名

結果及び考察

先ず各色彩について概念的に把握していた色彩を色彩表から選んだものの分布が表2の如くであつた。この際被験者数に対して各色彩の頻数が大なのは、色彩嗜好の段階で対象となつた色が二つあつた者がいる為である。各主要色につき全般的にみればB、Pに分数度が高く、Pは2個以上指摘した者が多い傾向を示している。又Rにおいては色彩番号88が半数を占めて多く、次いで95、87となり94は10%であつた。Yでは17が $\frac{1}{3}$ で16、13、7と続き、Gは28が30%で29、31、24、35となつている。同様にしてBは47が20%、56、58、続いて同率で45、49、57となつているが、特に集中的に選ばれたものがなく、Pでも近似の結果がみられ、74が $\frac{1}{4}$ に達せず、次いで73、71、68、75となつている。この事実から主

要色相においてすら概念的色彩は個人によつて多くの差異ある姿を認め得る。

表 2 概念的色彩の分布

N=80

Red			Yellow			Green			Blue			Purple		
83	1	12.5	4	1	1.25	19	3	3.75	38	2	2.5	62	2	2.5
86	2	2.5	6	1	1.25	20	4	5	40	3	3.75	63	3	3.95
87	15	18.75	7	9	11.25	21	1	1.25	42	2	2.5	64	1	1.25
88	40	50	10	10	12.5	23	5	6.25	44	4	5	65	4	5
89	3	3.75	11	2	2.5	24	11	13.75	45	8	10	66	6	7.5
90	6	7.5	12	1	1.25	25	3	3.75	46	6	7.5	68	10	12.5
91	3	3.75	13	20	25	28	24	30	47	16	20	69	4	5
92	1	1.25	15	5	6.25	39	16	20	48	5	6.25	70	1	1.25
94	8	10	16	22	27.5	30	5	6.25	49	8	10	71	13	16.25
95	21	26.25	17	27	33.75	31	14	17.5	50	1	1.25	72	7	8.75
						33	6	7.5	51	1	1.25	73	17	21.25
						35	8	10	52	7	8.75	74	19	23.75
						36	2	2.5	53	1	1.25	75	9	11.25
									54	1	1.25	76	2	2.5
									55	6	7.5	77	6	7.5
									56	11	13.75	78	3	3.75
									57	8	10	79	3	3.75
									58	10	12.5	80	1	1.25
									59	6	7.5	84	4	5
									60	2	2.5			
(10)	100		(10)	98		(13)	102		(20)	108		(19)	115	

※ 各色彩の左欄は色彩番号，中欄は頻数，右欄は絵被験者に対する出現率を示す。なお以下の表 3、4 における各欄も同様に示す。

次いで各主要色名の夫々の範疇に入ると考えた色彩を表中から選んだのが表3であり、夫々について最もその色名に相当した色彩を一箇選び

表 3 色名の範疇に入る色彩 N=80

R			Y			G			B			P		
82	4	5	1	2	2.5	18	7	8.75	38	5	6.25	60	7	8.75
83	5	6.25	4	4	5	19	14	17.5	39	11	13.95	61	8	10
85	14	17.5	5	15	18.75	20	21	26.25	40	3	3.75	62	20	25
86	2	2.5	6	4	5	21	17	21.25	41	3	3.75	63	23	28.75
87	74	92.5	7	55	68.75	22	24	30	42	10	12.5	64	15	18.75
88	80	100	8	5	6.25	23	25	31.25	43	8	10	65	12	15
89	3	3.75	9	3	3.75	24	37	46.25	44	27	33.75	66	32	40
90	37	46.25	10	29	36.25	25	46	57.5	45	9	11.25	67	32	40
91	36	45	11	3	3.75	26	18	22.5	46	54	67.5	68	65	81.25
92	13	16.25	12	1	1.25	27	31	38.75	47	36	45	69	54	67.5
93	2	2.5	13	78	97.5	28	67	83.75	48	34	42.5	70	30	37.5
94	32	40	14	1	1.25	29	66	82.5	49	56	70	71	35	43.75
95	53	66.25	15	22	27.5	30	54	67.5	50	3	3.75	72	28	35
			16	74	92.5	31	69	86.25	51	13	16.25	73	61	76.25
			17	80	100	32	2	2.5	52	61	76.25	74	60	75
						33	55	68.25	53	6	7.5	75	63	78.75
						34	26	32.5	54	10	12.5	76	29	36.25
						35	29	36.25	55	59	73.75	77	52	65
						36	5	6.25	56	48	60	78	17	21.25
									57	60	75	79	29	36.25
									58	28	35	80	9	11.25
									59	32	40			
									60	6	7.5			
(13)			(15)			(19)			(23)			(21)		

表 4 代 表 色

N=80

R			Y			G			B			P		
87	2	2.5	13	17	21.25	23	5	6.25	46	6	7.5	63	2	2.5
88	56	70	16	28	35	24	1	1.25	47	3	3.75	66	2	2.5
90	2	2.5	17	35	43.75	25	1	1.25	48	2	2.5	68	16	20
91	1	1.25				27	1	1.25	49	5	6.25	69	1	1.25
94	3	3.75				28	17	21.25	52	12	15	71	3	3.75
95	16	20				29	6	7.5	55	7	8.75	72	1	1.25
						31	38	47.5	56	6	7.5	73	11	13.75
						33	10	1.25	57	25	31.25	74	31	38.75
						35	1	1.25	58	5	6.25	75	3	3.75
									59	9	11.25	77	9	11.25
												80	1	1.25
(6)			(3)			(9)			(10)			(11)		

それを代表色として掲げたのが表4である。表2との関連において表3をみれば、各主要色とも予想された如く Category に入る色彩の数は概念的色彩の数より多く、各主要色別に色彩の出現率では、Rにおいて、88は全員がRとして認め87も極めて高率を示しており以下95、90、91、94となつている。同様にして他の主要色をみれば、Yでは17が全員、13、16も95%内外で、7が続き10は $\frac{1}{3}$ を僅かに越えるに留まつている。Gは31、28、29が80%以上、次いで33、30、25、24、27、35であり、Bでは57、55、49、46、56、47、48、58、44となりこれらが $\frac{3}{4}$ から $\frac{1}{3}$ の中に含まれ、Pでは68、75、73、74が $\frac{1}{4}$ を越え、69、77、71、66、67、70、76、79、72と続いている。これらの順位は夫々の主要色の Category に入ると考える者の多少を示すのであつて、表2の出現率のそれとの間に差異の類しい色彩は、概念上の印象の強弱、主要色の周辺の、移行的性格と

して受けとることができよう。なお、表2の出現率が表3のそれを越える色彩がないのは当を得ている。

表4の結果によれば分散の度合も表2・3に比して低く、特にYはその差が夥しい。Rでは88が圧倒的に多く95が $\frac{1}{5}$ で他は極めて少ないが、Yでは17、16、13と3色彩に限られ他の主要色に比して集中的であつた。Gでは31が最も多いが半数に満たず。次いで28、33となり、Bでは57が $\frac{1}{3}$ にも達せず、52、59と続き、分散度が5主要色中最高であり、Pは74が多く次いで68、73、77でGの傾向と類似している。これらの結果表4と表2を比較考察すれば、明らかに主要色の分散は代表色において何れも小である事から、概念的的色彩は具体的色彩に接して考えられた代表色と対比して不安定であると解し得ようし、又少なくとも嗜好判断に供せられる概念的的色彩は個体のもつ代表色としての基準から屢々離れるものと考えられる。この事は個々の色彩の出現率を両表によつて比較すれば明らかに認められるところである。

そこでこのような概念的的色彩と代表色との不一致について、色彩の概念化に影響をもつと考えられる要因の一つである主体的要因との関連を検討しようとするのであるが、その要因の中でも特に感情を伴う嗜好を採り上げたのは、色彩そのものが感情体験と極めて密接な関係を有すると考えられるところから、概念化の過程にあつて嗜好の及ぼす力を他に比して強いと推論したからに他ならない。表5は前述の“一致”“不一致”の色彩を評定価別に纏めたものである。それによれば全体として両者の不一致は $\frac{2}{3}$ を占めており、中でもBはその度が高く、P、Gも70%を越えているが、Rはほぼ相半ばした関係にある。好悪の評定度との関連では+3から-3の方向へ順次不一致の度合が減じ-3では寧ろ一致度が高くなつている。この事実は極めて興味ある傾向で、好む色彩の概念は不安定なものであり、好まぬ色彩の概念は比較的安定であると考え得るのか、あるいは好悪の判定に用いられる概念的的色彩は好む色彩に

表 5 概念的彩色と代表色の“一致”“不一致”の度合と色彩好悪の關係

	+3	+2	+1	0	-1	-2	-3	計	%
R		6	10	15	2	3	2	38	47.5
		7	14	13	5	3		42	52.5
Y	1	9	6	7	5	3		31	38.75
	6	9	9	17	4	4		49	61.25
G	3	2	7	7	3	1	1	24	30
	4	17	16	13	3	2	1	56	70
B	4	5	5	3	1			18	22.5
	15	25	11	9	1	1		62	77.5
P	3	5	6	3	3	2	1	23	28.75
	11	11	14	11	6	2	2	57	71.25
計	11	27	34	35	14	9	4	134	33.5
	36	69	64	63	19	12	3	266	66.5
%	23.40	28.13	34.69	35.71	42.42	42.86	57.14		
	76.60	71.88	65.31	64.29	57.58	57.14	42.86		

※ 各色彩の上欄は概念的彩色と代表色の一一致を、下欄は不一致数を示す。

については色彩そのものゝ概念が分化しており、多くの選択的色彩から適用する為、その過程に感情の力が働いて細分化された特定の色彩を選ぶ結果、このような傾向を生むのか、又もつと他のそして嗜好とも深い関連があると考えられる色彩の本来的質的要因及び経験的要因に根ざしているのかは本実験では決断し得ないが、少なくとも好悪の程度が両者間の不一致に関連ある事は指摘し得よう。同時に各主要色別に現われた結果では、R、Yで前記の傾向とやゝ異なつた事実をみる事ができるのは、色彩によつて現実経験の中で個体の受ける印象、感情価の強度が相異するところに原因を求める事がより妥当であるかは、今後の実験にまたねばならない。そして特に実験材料としての色彩の選択に留意しつ

つ、広範な組織的研究によつて、このような問題を処理し得るものと考
えられる。

以上の結果及び考察から、概念的色彩の研究にあつて、色彩嗜好と
の関係及び問題点を次の如く指摘し得る。

1. 概念的色彩の範囲は、それに対応する具体的色彩の範囲より狭く
2. また、夫々の代表色のそれより広く
3. 概念的色彩と代表色の一致及び不一致の度合はほぼ1:2の関係で
現れ
4. そしてその不一致の度合と色彩好悪との関係は好む色彩から好ま
ぬ色彩に行くに従つて低くなる。

(本学助教授)